

令和2年度事業報告

はじめに

社会福祉法人として5年目の事業年度にあたり、社会福祉法人円合併後3年が経過しました。

令和2年2月頃からの新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、各事業所がその対応に追われた1年でした。特にレストランの来客数の減少は著しいものがあり、利用者の方々の財源確保が大きな課題となっています。

新型コロナウイルス感染症対策として宮城県より福祉施設向けの補助金を受け、オゾン発生器や非接触式体温計、足踏み式アルコールスタンド、アクリル板等を各事業所に整備しました。

令和2年度も法人の運営方針である「障がいのある方たちが誇りと輝きをもって、ありのままに暮らす・働く」を基本に活動し、豊かな地域生活が営めるよう、その能力や可能性を最大限に伸ばすための支援活動をおこなってきました。

また、令和3年度に延期となった東京オリンピック・パラリンピックの仙台市の震災復興パラリンピック採火場に選定されていますので、引き続き仙台市と協議しているところです。

I. 就労支援事業及び生活介護事業について

①びあ

・就労継続支援事業（B型）

令和2年度は、4月からの新卒者2名を加え利用者37名でスタートし、年度途中で2名の退所者、1名の入所者があり、合計36名の利用者で運営してきました。

前年度から引き続き弁当の製造・販売事業を主たる事業とし、仙台市役所、上杉分庁舎、仮庁舎及び宮城県庁等で行政職員向けのフロア販売を行いました。弁当チケットを定期的（隔月で偶数月）に販売し、メニュー自体のトッピングや彩り、メニュー名の変更等、話題性や流行も考慮した顧客に訴求できる弁当を念頭に、販路を維持・拡大する工夫を進めてきました。また、Facebookやネットアンケートを利用し広報をおこないました。

新型コロナウイルス感染症の影響により外食する方が減少している中、販売食数は微増ではありましたが、食材の値上げ・販売価格の据え置きで収益が思ったように伸びず、工賃の更なるアップには繋がりませんでした。工賃財源の確保が引き続いての課題となっています。原材料費の高騰で原価率が上昇したことを受けて、原材料購入先の選別による利益の確保を図り、彩り良く旬の郷土食材を調理方法に工夫を凝らし更に顧客に支持される商品の開発と販売先の拡充を推進してまいりました。

びあベーカリーにおいては、各種丸パン（バターロール、レーズン、黒糖くるみ、うぐいす、チョコチップ、ほうれん草、塩コーン）、バゲット、生食パン等をレストランびあやびあてらすの店頭で、お弁当と一緒に市役所や県庁で販売してきました。商品開発も積極的におこなっており、メロンパンやクランベリーチーズパン、さつまいもパン、チーズパン、あんぱん、レーズンシュガー、1個入り100円パン等、順次商品として販売し好評を博しております。

令和2年度も各支援学校等から実習生を受け入れ、令和3年度は新たに

1名の方の利用に繋げております。支援学校卒業後の進路として、事業所の情報の周知に努めてきました。

・就労移行支援事業

利用希望者がおらず、サービスの利用はありませんでしたが、常に利用希望に対応できるよう体制を整えてきました。また、令和2年度も仙台市立鶴谷特別支援学校からの就労アセスメントの依頼を受け8名の方の就労アセスメントを作成しました。

② レストランぴあ

・就労継続支援事業（B型）

令和2年度は、利用者17名で運営してきました。

新型コロナウイルス感染症による不要不急の外出・外食の自粛の影響を受け、客席へのアクリル板の設置やレイアウトの変更等、対策には万全を期してきましたが、ピーク時には来客数が例年の1割程度まで落ち込み、年度の後半には3～5割程度まで回復したものの、依然として厳しい状況が続いています。レストランを利用しなくても購入できるテイクアウトメニュー（おうちごはん）を製品化し、感染予防と売上の確保の両立を図ってきました。加えて令和3年5月現在、セルフサービスも導入しています。

また、レストランの売上減少の対応策として、ぴあより弁当製造・販売の移譲を受け、オリジナル弁当として52食/日を製造し、市役所・県庁の職員向けに販売することで収入減少をカバーしてきました。ぴあのお弁当とはまた趣が異なる弁当を製造することで顧客の選択肢を増やし、選ぶ楽しみも提供できるようになりました。売上も好調で販売日は概ね全日売売を続けてきました。

しかしながら、コロナ禍でより厳しくなった工賃財源の確保が引き続きの課題となっています。

令和2年度も各支援学校から実習生を受け入れ、令和3年度は新たに1名の方の利用に繋げています。卒業後の進路として、また、見学会やお食事会でもご利用いただきました。

③ まどか

・就労継続支援事業（B型）

令和2年度は、利用者29名でスタートし、年度途中で事業所間で1名の異動、2名の退所者、1名の入所者があり、合計27名の利用者で運営してきました。

レストランぴあてらすにおいても新型コロナウイルス感染症の影響は著しく、1日の来客数が0という日もありました。

工賃財源となる売上確保のため弁当販売に力を入れ、名取市役所、太白区役所、近隣の専門学校等といった販路を新たに開拓してきました。あわせて各外販場所での顧客に訴求するようなメニュー作りも進めてきました。各外販場所によって販売回数や場所の確保といった販売方法に制限や課題がありますが、常連の顧客を獲得しつつあり、弁当販売自体が定着してきたところではあります。

引き続き、地場の旬の食材を取り入れたメニューを提供し、ベーカリー

びあぶらんのパン販売やまどか農園の野菜販売と連携してきました。地域住民の方々に親しまれるレストランになっています。

ベーカリーびあぶらんでは、引き続き無添加で国産小麦を使用した100%びあぶらんブランドのパンやクッキー、スイーツ等を製造、周辺の保育園や幼稚園、支援学校等から受注し、高い評価を得ております。

農園事業については、計画的な作付けを基本とし、減農薬栽培の実践に取り組みました。気候や天候に左右されにくく安定した作業時間を確保できるようにビニールハウスを1棟設置しました。栽培・販売方法の両立を図りながら利用者自らが栽培の喜びを体験する販売を推進してきました。

清掃事業については、近隣事業所から清掃業務を受託し定期的に作業をおこなってきました。

令和2年度も各支援学校から実習生を受け入れ、令和3年度は新たに1名の方の利用に繋げています。卒業後の進路として支援学校の生徒や保護者、教職員等の見学会をおこない事業所の情報の周知に努めました。

④まどか西中田

・就労継続支援事業（B型）

令和2年度は、利用者9名でスタートし、年度途中で事業所間で1名の異動、1名の退所者があり、合計9名の利用者で運営してきました。

利用者の就労体験や作業訓練、言葉の使い方、挨拶等といった人との接し方、作業意欲の向上を図りました。また、利用者自身の活動が自分たちの工賃の向上に繋がるよう考える機会を作る支援をおこない、あわせて販売活動で人間形成に必要な自立意識の向上、育成を図ってきました。

基板解体事業については、作業の効率化を図りつつ、生活介護事業の利用者にも作業に参加してもらうことで事業所としての一体感を醸成してきました。

令和2年度も各支援学校より実習生を受け入れ、令和3年度は新たに1名の方の利用に繋げています。支援学校卒業後の進路として、事業所の情報の周知に努めてきました。

・生活介護事業

令和2年度は、利用者9名で運営してきました。

日中活動支援の充実を目指し、穏やかな時間の流れに寄り添った、きめ細やかな支援に取り組みました。また、新型コロナウイルス感染症対策のため外出が難しくなった中で体力維持のために支援内容の見直しにも取り組みました。

常時介護等の支援が必要な方に、食事及び排せつの介護、創作的活動等を提供し、生きがいと誇りのある生活支援をおこなってきました。

令和2年度も各支援学校より実習生を受け入れ、令和3年度は新たに1名の方の利用に繋げています。支援学校卒業後の進路として、事業所の情報の周知に努めてきました。

II. 相談支援事業について

あしすとぴあ

- ・ 指定特定相談支援事業所
- ・ 指定障害児相談支援事業所

障害のある方々が障害福祉サービスの支給決定を受けるにあたって行政に提出が必要なサービス等利用計画案・障害児支援利用計画案及び本計画を作成・提出し、モニタリング等の継続支援をおこなってきました。

一人事業所として受入人数が限界に達しているため、新規受入の制限や、他の相談支援事業所へケースを繋ぐことで対応してきました。

新たに設置される仙台市基幹相談支援センターのガイダンスとヒアリングを受けました。今後、センターとは相談支援専門員の支援の選択肢を増やすために連携していきます。

Ⅲ. 共同生活援助事業について

ぴあぴーんず

令和2年度は利用者の方2名でのスタートとなり、3月に1名の入所者があり合計3名の利用者と体験ステイ4名（合計6回利用）で運営してきました。定員4名を満たすべく法人内部はもとより外部からの利用者も募るために、あしすとぴあや他法人の相談支援事業所、各区役所と連携しています。

ぴあ・レストランぴあ拠点及びまどか・まどか西中田拠点、それぞれの拠点地域でのグループホーム新設に向けて、職員による他法人グループホームの見学会、利用者・保護者への説明会、建築業者やハウスメーカーとの打合せを随時おこなってきました。

また、グループホーム新設に向けた財源補填のための寄附を募集し、621,000円のご寄附をいただきました。

Ⅳ. 広報活動について

仙台市の新型コロナウイルス感染症対策補助金を利用してホームページを更新し、事業所の情報や活動内容を積極的に発信してきました。引き続き、法人の広報や弁当の販促にfacebookやネットアンケートを活用することで、情報の拡散、売上や知名度の向上を図りました。なお、ホームページに関しましては、より訴求力のある媒体にするべく全面的なリニューアルを進めています。

仙台市のコンサルタント助成事業を活用し、ぴあてらすに関するポスティングのチラシ等を作成することで近隣住民の方々への広報を再度おこないました。

また、後援会と連携し、後援会だより等でより幅広い層の方に法人・事業所の活動を知ってもらうことができました。

Ⅴ. 啓発活動について

宮城県庁18階のレストランぴあを始めとし、宮城県の障害者支援のアンテナショップとして、法人の理念である「障がいがあってもなくても、今できるありがとうをみんなで社会に還元していく」を実践してきました。福祉だけでなく宮城県、仙台市の被災後の食の安全と産業再生への地域的取組みも併せて積極的に発信してきました。

Ⅵ. 地域生活支援事業（余暇活動等）について

・コーラス活動（ぴあま〜る）について

在仙アーティストの猪狩太志氏の指導の下で土曜日にコーラス練習会

(合計6回)をおこないませんでした。コロナ禍のため練習会の回数は例年の半分程度になり、発表の場もほとんどない状態でした。そのような中でも開催された「宮城野うたまつり」等に参加し、練習の成果を発揮することができました。

・卓球練習会について

外出自粛による運動不足解消のため卓球練習会(合計8回)をおこないませんでした。卓球経験のある職員を中心に、ウォーミングアップから試合形式の練習まで身体を動かし汗を流しました。

・レクリエーションについて

新型コロナウイルス感染症対策を万全にした上で、利用者の方たちと職員が集うクリスマス・忘年会等、仕事仲間との楽しい時間を共有していただけるような機会を事業所毎に組み込んできました。

・研修旅行について

8月9日に鮎川・金華山方面、11月3日に岩手方面、気仙沼方面に希望者で研修旅行をおこないませんでした。新型コロナウイルス感染症の影響により日帰りでの研修旅行となりましたが、団体での行動等、日常とは異なる体験をすることで充実した社会研修となりました。

Ⅶ. その他

・職員研修

外部研修として下記の研修に職員を派遣しました。

「社会福祉法人における新型コロナウイルス感染症BCP策定」

「避難確保計画作成等に関する説明会」

「甲種防火管理(新規)講習」

「親なきあとの暮らしの現状と課題」

「中堅職員研修」

「令和2年度HACCPの考え方を取り入れた衛生管理研修会」

「社会福祉法人の事業展開の今後」

各事業所の多忙な通常業務の中で職員の研修への参加は負担の大きいものでしたが、職員間の連携で資質向上のための多くの研修に繋げることができました。新型コロナウイルス感染症の影響もありリモートでの研修への参加が増えたことも特徴的でした。

・健康管理について

利用者・職員等の健康維持のため、健康診断を実施し、嘱託医の金野公一医師及び沖田内科医院の沖田医師のご指導の下、利用者等の健康管理に留意してきました。